国語科

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 端名, 秀雄, 谷口, 仁, 早谷, 憲子, 折川, 司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00058144

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

国語科

端名　秀雄
谷口　　仁
早谷　憲子
共同研究者　折川　　司（金沢大学）

１．伝統文化教育を進めるに当たって

平成 26 年度から 28 年度にかけて ESD 研究「グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成」を展開してきた本校において，国語科では思考力・判断力・表現力の向上を強化してきた。平成 29 年度に入ってからは，ESD 研究の理念や手法を踏襲しつつ，伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発「伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発―グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指して―」に取り組んできている。国語科においては,「言語文化や古典を題材とし，学年を追って自国の伝統文化に対する考えを深化させ，発信することができるように学習すること」,「ものの見方や考え方に触れ，他者と自分の考えを比べることで，より広い視野を持って自分の意見を形成できるように学習すること」に重点を置いた研究を進めてきており，こうした中で，生徒たちは古い時代と現代との文化的な接点や差異，時間の流れによる変容等を見付け，それらの面白さや価値，理由について自分なりに考えを深めたり，それを表現したりすることができるようになってきている。

伝統文化教育研究の３年次にあたる今年度は，本校の研究が目指す〈身に付けたい三つの資質・能力〉の中で国語科が担うことができる資質・能力を明らかにするとともに，それを育成する方法を三点に焦点化し，それぞれの有効性を検証した。育成する過程においては，生徒が思考・想像したことをどのように表現し，交流を重ね，言語感覚を豊かなものにしていくかという点に傾注している。

２．能力・態度の育成に当たって

（１）学校全体として育成する資質・能力について

国語科では，言語活動を通して汎用的な能力を養うことに加えて，本校の研究が目指す身に付けたい三つの資質・能力を育成するために，以下のような構想を立てて研究を展開することとした。

「①日本の伝統や文化に関する理解」については，我が国の言語文化に関する学習を通して身に付けることができると考えている。各学年で目指す生徒の姿を設定し，目標とした。

１年生「古典作品に触れ，古典の世界に親しむことができる。」
２年生「古典に表れたものの見方や考え方を理解することができる。」
３年生「歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して古典の世界に親しむことができる。」

「②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度」については，方言など，自国の言語文化を学ぶ中で養うこととした。言語活動を通して多様な考えを知ったり，課題を解決した

りする学習活動を編成していった。

「③文化の伝承・創造への主体性など」については，言語文化として学んだ短歌や俳句などを創作する活動を通して育成し，我が国の伝統と文化に対する関心や理解を深められると考えている。また，古典作品や日本の言語文化を理解し，自分の表現に生かすことができることも③の資質・能力に結び付くと見通している。さらに，これらを理解することから，言葉を根拠にして，自分と照らし合わせて作者の思いをまとめることができたり，感じたことや考えたこと，想像したことを表現できたりすることも③の資質・能力につながるとして学習計画を立てた。

①日本の伝統や文化に関する理解

「竹取物語」では，作品の現代語訳などを通して，作品に描かれた昔の人のものの見方や考え方が現代人にも通じることがあることを理解させた。〈１年〉

「枕草子」では，そこに表れた清少納言のものの見方や考え方，巧みな表現について分析することで季節感に対する考えを深めることをねらいとした。〈２年〉

「古今和歌集仮名序」では，音読や読解によって，古人が和歌をどのようなものとして捉えていたかを理解し，古文のリズムに親しんだ。〈３年〉

②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度

「花曇りの向こう」では，祖母のつかう関西方言が会話文として作品の魅力にもなっている。本来，音声言語である方言が，このような形で文学作品に用いられることによって，さまざまな効果をもたらすことを作品を通して理解させ，方言の味わい深さを実感させた。

「空を見上げて」で，女川の中学生が作った句に，自分たちが作った句を重ねていく活動を行った。そのような連句的な活動を通して，日本の伝統文化である「連句」「連歌」についても学習すると同時に，そのままでは無理だが，翻訳を通して，様々な国の人々とも通じ合える活動であるということを理解させた。〈１年〉

「方言と共通語」と「盆土産」の関連学習として，作品を金沢ことばで表現する活動を目指した。自分たちの住んでいる地域の言葉で作品を表現することにより，方言の特徴や他言語と比較していく考え方に目を向けるためのきっかけとすることを目指した。〈２年〉

「春に」では言葉に託された思いをどのように朗読で表現できるのかを考えた。合唱曲となっているので，音楽としての捉え方と朗読する自分たちの捉え方がどのように異なり，どこが共通しているのかなどを考え，日本人にとっての「春」という季節の捉え方なども踏まえて，言葉の連なりやイメージの連なりを味わうことをねらいとした。〈３年〉

③文化の伝承・創造への主体性など

「今に生きる言葉」では，故事成語の故事について学習するとともに，故事成語を用いた短文づくり等を通して，自分たちが言葉の使い手となる意識を持たせた。〈１年〉

「新しい短歌のために」では，物語の場面を描いた短歌を創作した。その際，選んだ語句・表現の意図や描こうとした場面の情景を互いに説明し合うことで，より伝わる作品に仕上げるための工夫や表現について助言や改善点を考えさせた。〈２年〉

金沢市で行っている観能教室に向けた学習として，平家物語に触れ，能「八島」で描かれている背景を理解し，能や狂言を鑑賞し，学んだことや感じたこと，考えたことを「魅力的

な紙面を作ろう」でまとめた。

「俳句の可能性」や「俳句を味わう」では，少ない字数で表現される情景や心情を味わい，自分の創作につなげることを目指した。自分の身の回りの風景や好きな時間，心に残る出来事などをテーマに，歳時記を活用し，有季定型の俳句を作った。

また，和歌の歌合をすることを通して，歴史的背景や作者が置かれた状況，表現の効果等の理解を図り，自分自身の言葉で語れることを目指した。〈３年〉

（２） 関連・連携を図った教科等について

〈１年生〉

・社会…方言と共通語について学ぶ。（「花曇りの向こう」）

・社会…連歌・連句の歴史を学ぶ。（「空を見上げて」）

〈２年生〉

・ 社会…定型詩の文化と，それによる表現の工夫と実践。(「新しい短歌のために」)

・ 社会…歴史や文化により登場人物や世界観への理解を深める。(「扇の的－『平家物語』から」)

〈３年生〉

・ 音楽…合唱曲の音楽の表現と詩の言葉の解釈について考える。(「春に」)

・ 音楽，社会…能・狂言の歴史や内容や謡，楽器について学ぶ。(古典芸能の世界)

３．成果と課題

１年生では，「竹取物語」という生徒たちにもなじみのある古典作品を通して，古典は決して単なる「昔話」ではなく，作品中にみられる発想は，現代人のそれと比較してもそん色のないものであることを理解させることができた。

日本の言語文化に関することとして，「花曇りの向こうに」に登場する関西方言と，自分たちの用いている「かなざわ言葉」との違いなどについても考えさせた。しかし，「かなざわ言葉」は使わないとか，表現しにくいなどという意見もあり，地域の言葉（伝統文化である方言）を尊重するという意識を持たせるためには，方言だけを学習する時間を設けるなど，何かしらの工夫が必要であることを実感した。

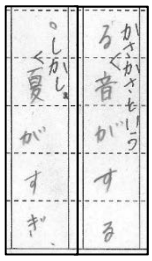
「故事成語」の学習では，同じ故事成語についていろいろな短文を作らせて比較することを通して，古典にまつわる言葉の使い手となる意識を持たせることができた。

２年生では，「枕草子」で自分流の「枕草子」を書く活動を行うにあたり，次の二つを課題とした。一つは清少納言の随筆に見られる視点や表現，特徴をとらえ，自らの作品に取り入れることと，もう一つは交流の中で得た助言をもとに，より伝わる表現を目指して改善することである。前者は，好ましくないものによる対比や数詞といったわかりやすい表現のほか，五感による捉え方や時間の変化，繊細な描写や言葉の選び方に着目し，自分の文章に活用する生徒の姿が見られた。（図 1）後者は，読み手に分かりやすい文章表現としての指摘のほか，前述した筆者の随筆の特徴に近づけるための指摘や助言ができていた。交流・助言により「語彙」の獲得にもつながったと考える。（図 2）

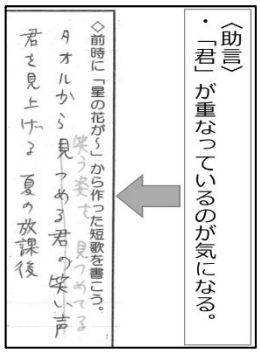
夏はかえる。夜になると近くの田んぼから聞こえる鳴き声が良い。特に雨上がりの夜は、より一層美しいものである。
まれに、部屋の窓にくっついて、休んでいることもある。ぬれた腹、丸みを帯びた足もまたかわいらしい。しかし、群がっているかえるは少し気持ち悪いものである。

(図 1)語感や描写に注目した作品

「新しい短歌のために」では，物語の世界を表した歌集づくりを目標とし，短歌と解説文を併せて作る活動を行った。伝えたい場面や印象を明確にすることで，語句や表現が印象を伝えるために適切であるかどうかの評価や推敲を相互に行い，感じたことや考えたことを書く力を磨き，言葉に対する感覚を高めることを目的とした。グループ活動の助言により，生徒たちはより伝わる表現に向けて予期しなかった伝わり方に対する改善を行い，短歌やその解説文を改善していた。(図3) 一方で，解説文が短歌に対する解釈の妨げになったり，物語からの創作が伝えたい場面を切り取るという短歌のねらいが弱まったりといった課題が見られた。


かすかさやいう
る音がする
。しかし、
く夏がすぎ。

(図 2)助言による改善の例


〈助言〉
・「君」が重なっているのが気になる。
◇前時に「星の花が～」から作った短歌を書こう。
タオルから見つめる君の笑い声
笑う姿も見つめてる
君を見上げる夏の放課後

(図 3)助言による改善例

また，「自分が調べてきた『伝統文化』について意見文を書こう」とし，「伝統文化」に対して，自分が考えたことを意見文に書く活動を行った。自分の意見に対する根拠や具体例に対して，互いに考えを述べ合うことで，自分の文章に生かす活動に取り組むことで研究主題に迫った。また，漢語を中心とした抽象的な概念を表す語句を活用させることで，限られた字数で自分の考えをまとめるとともに，語彙に関する内容との関連を図った。生徒たちは意見に対する互いの考えを述べ合うことで，自分の意見や根拠の適切さを確かめ，見直して書くことができていた。また，「使う」という目的意識をもって語彙を増やそうとする姿勢が，生徒の文章や振り返りからも確認できた。

〈振り返りのワークシートより〉

・学習を通して，根拠が又聞きのようなあやふやなものでは駄目だと思った。説得力を上げるには，もっと事実に基づいた表現を取り入れ，誰が見ても理解でき，納得できるものを目指したい。

・反論を検討することで説得力を増すことができた。具体的な数字を使うと，誰が聞いても納得できる意見にできた。他の人の意見から，文章構成の重要性も感じた。

・もっと読者をひきつける書き方を考えたい。自分の語彙をもっと増やすと，相手に自分の考えが伝わりやすくなると思う。

３年生では，詩や俳句，短歌の学習において，なぜ，その言葉にしたのかに着目したり，その言葉を使うことによってどのような効果があるのかを考えたりした。言葉が持つイメージや微妙な言葉のニュアンスの違いを感じることができるようになってきた。

〈語彙ノートの生徒の記述より〉

・「いとまごい」には「礼儀正しく出発する行為」という意味があり，ただの別れではないことが分かる。

・筆者が「動作」ではなく，「挙動」を使ったのは単なる動きだけではなく，表情や座り方，手の置き方などすべてにおける喜助の様子を表すためではないか。

和歌の歌合の様子

また，和歌の歌合をした際に，歴史的背景や作者の人物像，表現技法の効果なども考えて，一つの和歌を理解し，和歌の世界に親しむことができた。歌合をするためには選んだ和歌をしっかりと調べ，自分で理解しなければならないので，生徒は相手にわかりやすく伝わるように表現を工夫してまとめていた。現代にも通じる思いや現代ならばどのような状況に通じるかなども考え，理解を深めていた。

また，社会科や音楽科との連携として，金沢市で行われている観能教室の鑑賞に向けて，能や狂言の学習を行った。社会科では歴史的な事項を，音楽科では実際に能楽師の方をお招きして講演を聞いたり，楽器に触れたりした。そこで国語科では学習したことをまとめて，後輩に向けて新聞記事を作成した。後輩に伝統芸能である能や狂言を紹介するとともに，伝統芸能に対する自分の考えも書くことができた。

さらに，日本人としてのアイデンティティーにつながる取組として「学校で古典を学ぶ意義」を考えた。高校生を相手として文章を書くことによって，今まで学校で学習した古典からの学びを振り返り，どのようなことが理解できたかやどのようなことに学びがつながっていくのかを考えることができた。書いた文章は班で推敲し，よいと感じた文章を高校生に送り，読んでもらうこととした。それらを用いて高校生と交流授業を行った。高校生から文章構成や内容についてわかりやすい言葉でアドバイスをもらうことによって，視野を広げて考えることができた。課題としては，資料の引用を行う際に使った著名な人や専門家の考えに流されて自分自身の考えとなっていないものが多々あったことが挙げられた。自分の考えを他者の考えや具体例と結び付けて書く際の注意点が明らかとなったので，次回はつながりの部分を丁寧に考える時間を設けたい。

〈振り返りのワークシートより〉

・班の人から参考文献の前後のつながりを意識した方がいいというアドバイスをもらったので，今回の学習を生かして，より説得力のある文章を書きたいです。

・説得力のある引用を使っても主張と結びつかない場合は意味がないとわかりました。また，今回の授業で引用としてもおもしろい古典を紹介してもらって，古典への興味がより湧きました。

・他者の考えを引用するとき推測で終わらないことが重要だと分かりました。そして，具体例を述べるとき，事実を述べるだけにならず，自分の考えを書くべきだと知りました。

・文章を書くときに参考資料が適切か念入りに調べたが，他者の意見よりも自分の言葉の方が大切だと改めて知りました。

高校生との交流授業の様子

実践事例

国語

学年	関係・連携の考えられる教科等
１　年	社会

授業内容

「花曇りの向こう」（瀬尾まいこ）

方言が文学作品に用いられることによって，様々な効果をもたらすことを作品を通して理解させ，方言の味わい深さを実感させる。

教科等で身に付けたい力（本時について）	育成したい資質・能力
・登場人物の心情について，会話文をもとに考えることができる。	②伝統文化の理解に基づいた多様な文化を尊重する態度。

授業のポイント・流れ

１　前時までの内容を振り返り，会話文に注目させる。（７分）
文章中の会話文に印をつけさせる。

２　印をつけた会話文の中から，方言を用いた会話文に注目させる。（１５分）
それらが共通語との会話の中で，どのような役割を果たしているのかを考えさせる。

３　祖母や友人の方言による会話文は，主人公の心を和ませてくれていることを理解させる。（１０分）
心が晴れない主人公に対して，特に祖母の方言による一言が和ませてくれていることを実感させる。

４　方言による会話文を共通語に言い換えてみよう。（１５分）
方言による会話文を共通語に言い換えさせ，対話の印象がどのように違ってくるかを考えさせる。
・言葉がきつく感じられる。
・冗談として受け止められにくくなる。など

５　**方言には心情表現の手段としての素晴らしさや，味わい深さがあることを確認する。**
方言の良さについて確認する。（３分）

実践事例

国語

学年	関係・連携の考えられる教科等
２　年	社会

授業内容

「新しい短歌のために」馬場あき子，「短歌を味わう」

物語から創作した短歌を解説しよう。

教科等で身に付けたい力（本時について）	育成したい資質・能力
・作った短歌や解説文を互いに読み合い，語句や表現の効果について交流し，自分の考えを広げている。【書くこと】	③文化の伝承・創造への主体性など

授業のポイント・流れ

１　本時の課題を知る。（５分）
　・前の時間に作った，物語の場面や様子を表す短歌の活動について，学習したことや意識して取り組んだことを確認する。

２　解説文を書くための観点を確認する。（１０分）
　・ワークシートに記述した，
　①三十一音に込めた物語や情景，②想像を膨らませた内容，
　③選んだ語句や表現とその意図　　のほか，
　第１時で考えた解説文の要素も参考にする。

３　創作した短歌に解説文を書く。（１５分）
　・短歌を見た人に想像してほしいことを言語化する。
　・ワークシート①の①～③の活動を，文章化する意識で取り組む。

４　短歌と解説文をグループで交流する。（１０分）
　・短歌や解説文は観点を満たしているか評価する。
　・書き手の意図を理解したうえで，アドバイスや助言を行う

５　短歌を一つ選び，グループで出た感想や助言を紹介する。（１０分）
　・短歌の作者ではなく，同じグループのメンバーが，話し合った活動をまとめて発表する。

※短歌で伝えたい世界観を解説文により共有することで，短歌の語句や表現をより良いものになるよう助言しあったり，他の生徒の用いた工夫を取り入れたりして，より適切な語句や表現を限られた字数の中で検討し，言語感覚を磨くのが目的である。
この後，推敲・清書した短歌を一冊にまとめて，学級全体で鑑賞し合う活動へとつなげていく。

実践事例

国語

学年	関係・連携の考えられる教科等
３　年	音楽・社会

授業内容

「魅力的な紙面にまとめよう」

能・狂言について学習したことや観能教室で感じたこと，考えたことを紙面にまとめる。

教科等で身に付けたい力（本時について）	育成したい資質・能力
・情報を整理して文章にまとめ，伝えたいことをわかりやすく書くことができる。	③文化の伝承・創造への主体性など

授業のポイント・流れ

１　本時の課題を知る。（５分）

・音楽科や社会科の授業で学んだことや観能教室で感じたこと，考えたことを構成を工夫して紙面にまとめる。

・目的を示す。

→能・狂言の学習や観能教室で感じたこと，考えたことを観能教室を体験していない下級生に紹介する。よいものは図書室に掲示することを伝える。

・書く時の視点として次の五つを示す。

①内容が明確であること。

②文章構成や表現の工夫をすること。

③コラム，図表やイラストなどを活用すること。

④見出しを工夫すること。

⑤考えたことや感じたことを書くこと。

※能・狂言に実際に触れてみて，どう感じたのか，考えたのかを書く。

・（楽器を体験して）舞台の上で実際に楽器を弾く方々も仕事を楽しみながら深めていっているのかなと思った。こんな貴重な体験をさせてもらえるなんて運がよかったと思う。これから能を見るときは舞や謡だけではなく，音楽や楽器を弾いている人たちにも注目してみたいと思う。

・私は能の魅力はすべてが関わり合って一つの舞台ができていることだと思いました。（中略）現代のたくさんのものがある舞台もよいけど，こういう能も残していくべきだなと思いました。

２　紙面にまとめる。（４０分）

・見出しの工夫を新聞記事を例に確認する。

・パンフレットを切り貼りしてもよいことを確認する。

３　次回の活動を確認する。（５分）

①互いに読み合い，評価し合う。

②魅力的だと思った紙面を紹介する。

・どこが，なぜよかったのかを明確に伝える。

③伝統芸能に対する自分なりの考えを持つ。